

シェイクスピアの人間観について
——こころのバランス——

佐々木 隆

2004年10月

日欧比較文化研究 第2号

日欧比較文化研究会

シェイクスピアの人間観について ——こころのバランス——

佐々木 隆

プロローグ

シェイクスピアは「一時代のものではなく、あらゆる時代のためのもの」⁽¹⁾であり、言い換えれば、「一国のものではなく、あらゆる国のためのもの」である。「百万人の心を持つ」シェイクスピアは、時代や国や文化を超えた解釈が成り立つ。われわれがシェイクスピアに触れた時、彼の作品から一体何を感じとるのだろうか。

日本で生まれ、日本で育った者は、知らず知らずのうちに日本文化を背景にしてシェイクスピアに触れることになるだろう。われわれ日本人が、アイデンティティを持ってシェイクスピアに取り組んだ時、どんな人間観を感じ取るかを考察していきたい。

1 日本人としてシェイクスピアに触れるとは？

われわれがシェイクスピアを読む時、あるいは観る時（聞く時）、何が心に残るだろうか。三好弘は『シェイクスピアと日本人のこころ』の中で、

シェイクスピアを読んで考えるとは、日本人の心で新しい意味を見通すこと⁽²⁾

になるのではないかと述べている。日本人としてのアイデンティティを意識してみると、初めて日本人としてシェイクスピア翻訳の全訳を個人で果たした坪内逍遙は、1910年の「日本に沙翁劇を興さんとする理由」の中で、

日本に沙翁劇を日本人の心で別途に解釈を試みるといふことは、世界文芸上の一つの貢献⁽³⁾

であると述べている。これをもう少し深く考えるには、「日本人のこころの真髄は何か」ということが大きな問題となる。三好弘は『シェイクスピア——孤独と断絶』の中で

西洋のシェイクスピア論の背後には、キリスト教の論理があるのは周知のとおりだ。日本にはどのような論理があるのだろうか。日本の文化の中で、シェイクスピアを理解する論理とは何か。(中略) 日本文化を仏教というひとつの思想に還元してシェイクスピアをとらえようというわけだ。⁽⁴⁾

という考え方を提示した。そもそも「仏教のねらいは、人間の心のあり方」⁽⁵⁾で、仏教の根本は「空」と言われている。仏教の中でも茶道をはじめ、様々な芸術と結びついた禅思想を中心にして考えてみると、実践的に言えば、「無心」「執われないこと」というのが禅思想の第一と言うことになる。⁽⁶⁾簡単に言えば、すべてのものは、相対的な関係にあり、ひとつの主義に執われたり、絶対視してはならないということになる。⁽⁷⁾

2 「執着心」と「こころのバランス」

シェイクスピア劇では「執着心」が大きなキーワードになっているのではないかと思えることが多い。後に詳しく触れるが、例えば、ハムレットは自分の名誉ということへの執着から、なかなか復讐を実行に移せなかった心の葛藤があった。マクベスは権力への執着心から国王を殺害するに至る。リア王は、娘に財産を生前分与しながら

ら、権力だけは手放したくないという執着心が悲劇の元になっている。オセロは妻のデズデモーナの愛を最後まで信じ切れず、嫉妬から妻を殺すに至る。嫉妬は冷静な判断ができなくなる愛情と表裏一体の執着心ということになるだろう。重要なことは、「権力」「財産」「復讐」「嫉妬」といったことが問題なのではなく、そこに「執着する心」が問題なのではないかということだ。逆に言えば、「執着心」にとらわれないことが悲劇に陥らない方法ということになるかもしれない。

「執着心」とは、「執われる心」ということだ。では、「執われること」とはどんな状態であるかと言えば、「こころのバランス」がくずれた状態ということになるのではないだろうか。田上太秀の『仏陀のいいたかったこと』に次のような一節がある。

肉体的なもの、精神的なものを含めて人の欲に、善い欲、悪い欲というものが本来あるわけではない。その欲がバランスをくずして極端に走ったときにそれが悪い欲になるのである。⁽⁸⁾

もし、欲を極端に否定すれば禁欲主義となり、欲を極端に肯定すれば快樂主義となる。「善と悪」があるとすれば、それはバランスがとれているかどうかになるのではないだろうか。

Because of ignorance and greed, people imagine discriminations where, in reality, there are no discriminations. Inherently, there is no discrimination of right and wrong in human behavior; but people, because of ignorance, imagine such distinctions and judge them as right or wrong. ⁽⁹⁾

仏教で言う「無明」と「貪愛」（「貪欲」）は、「執着」を押し進めたものであり、「執着」が人の判断を鈍らせると言うことを述べている。

In like manner people make a distinction between good and evil, but good and evil do not exist separately. Those who are following the path to Enlightenment recognize no such duality, and it leads them to neither praise the good and condemn the evil, nor despise the good and condone the evil. ⁽¹⁰⁾

シェイクスピア劇の中では禅思想の第一である「無心」、すなわち「執われないこと」を表現している箇所が多く見受けられる。例えば、『ハムレット』では、王子の本心を探り出すためにローゼンクランツとギルデンスターンがウィッテンバーグから呼び寄せられ、ハムレットと対面した時の台詞でハムレットは次のように述べている。

There is nothing either good or bad, but
Thinking makes it so.
(*Hamlet*. II . ii .249-250)

また、作品は違うが、「善と悪」を述べている以下の台詞にも注目しておきたい。

The web of our life is of a mingled yarn, good and ill
together. Our virtues would be proud if our faults whipt
them not; and our crimes would despair if they were not
cherish'd by our virtues.
(*All's Well That Ends Well*. IV . iii .67-70)

「こころのバランス」を意図的に操作することが正しいかどうかは難しい。『ロミオとジュリエット』の中でロレンス修道僧は薬草や毒草を摘みながら、次のように述べている。

Virtue itself turns vice, being misapplied,
And vice sometime's by action dignified.
(*Romeo and Juliet*. II .iii .21-22)

使い方次第で全く逆の結果となることを指摘している。『正法眼蔵随聞記』には「善悪と云フ事定メ難し」⁽¹¹⁾とあるように、「善と悪」を決める判断基準は極めて難しいということになる。前述の通り、すべては相対的な関係の上から成り立っているからだ。キリスト教に少し触れてみると、悪の象徴であるサタンも、実はルーシファーという天使であったのだが、自分が神になろうとして、神との戦いに敗れ、地獄に落ち、闇の帝王となったという経緯も考慮すると、「善と悪」はまさに表裏一体とも言える。

3 「理性」と「こころのバランス」

「執着」がどのような程度となるかは、「こころのバランス」にかかっているとと言っても過言ではないだろう。では、このバランスを調整するものは何か。「もっと金持ちになりたい」、「もっと偉くなりたい」、「～したい」というところが感情に強く左右されるとすれば、理性がひとつの抑制力の働きをすることになるのではないだろうか。

「理性と感情（本能）」の問題は、18世紀の文学や哲学の大きなテーマとなっている。しかし、この問題は何もひとつの時代の問題ではなく、むしろ永遠のテーマとも言えるわけである。シェイクスピアは『ハムレット』の中で人間について次のように述べている。

What is a man,
If his chief good and market of his time
Be but to sleep and feed? A beast, no more!
Sure be that made us with such large discourse,
Looking before and after, gave us not
That capability and godlike reason
To fuse in us unus'd.
(*Hamlet*. IV.iv.33-39)

理性で感情を抑えることは一見正しいように思えるが、事物の絶対的価値は不定なのです。しかし、不定の中にこそ、真実があるのではないだろうか。

The problems of evil would be no problem at all, if good and bad were clearly labeled in black and white. The difficulties of choice are the source of tragedy.⁽¹²⁾

同じことは、先に述べたように執着心にも当てはまる。

But if one carefully considers all the facts, one must be convinced that at the basis of all suffering lies the principle of craving desire. If avarice can be removed, human suffering will come to an end.⁽¹³⁾

ここに禅的なものを感じ取るとは無理だろうか。物事にとらわれない心は禅でいうところの「無」と言ってよい。ピーター・ミルワードは『シェイクスピアと日本人』の中で、

西洋の虚無は、アリストテレスに由来するスコラ哲学的な金言で「虚無より生じず」と謳われているように空虚で消極的な非存在である。これに対し、日本的な無は、私の知る限りでは、満たされた積極的な無であり、すべてのものを指すような逆説的な意味に近い。このように考えると、無は「悟り」と称される境地に到達するために、心からありとあらゆる雑念を没収するという、禅仏教の目的とも係わってくる。(14)

と、述べている。絶対的な価値観から捉えようとする西洋の論理と相対的な価値観から捉えようとする日本の論理には大きな隔たりがあるようだ。「理性と感情」の問題にしても、結局の所はバランスをどう扱っていくかが、最大の問題なのだ。物事を相対的に捉えるということは、表裏一体、両面性、本音と建前を認めることからすべては始まる。相反するものが同時に存在することを認め、それをどうとらえていくかが大きな問題となる。

シェイクスピアはハムレットの友人ホレーシオをある種理想の人間と考えた。ハムレットは彼のことを次のように評している。

For thou hast been

As one, in suffer'ing all, that suffers nothing:

A man that Fortune's buffets and rewards

Hast ta'en with equal thanks; and blest are those

Whose blood and judgement are so well comeded

That they are not a pipe for Fortune's finger

To sound what stop she please. Give me that man

That is not passion's slave, and I will wear him.

(*Hamlet*. III. iii. 264-270)

人間は理性があることで他の生き物と異なるわけだ。シェイクスピアも人間を讃美して、次のように述べている。

What a piece of work is a man! How noble in reason!
How infinite in faculties! In form and moving, how
express and admirable! in action, how like an angel!
(*Hamlet*. III. ii. 305-306)

このような人間の理想の姿は、「理性的な動物」というアリストテレスの人間の定義を思い出させる。人間が人間でありうることを説明しようとすれば、人間以外の動物との比較の中で、その本質がはっきりと見えてくるのではないだろうか。

エピローグ

日本人としてシェイクスピアに触れた時、何が心に残るのかを初めに、「執着心」「こころのバランス」「理性」について述べて来た。その中で多くのシェイクスピアの言葉を引用してきた。しかし、シェイクスピアも述べているように、

But men may construe things after their fashion,
Clean from the purpose of the things themselves.
(*Julius Caesar*. I. iii. 34-35)

と、文章の解釈だけではなく、もっとひろく一般の事件や出来事について問題なのは、解釈の主観性、恣意性ということになるのではないだろうか。同じ言葉を聞き、同じ出来事に遭遇しても、人によって受けとめ方は異なる。「善と悪」の問題でも触れたように、物事

の良し悪しやとらえ方は相対的な関係となる。これまで見てきたように、「こころのバランス」を考える時、禪的なものを意識すると、シェイクスピアをより日本人が受け入れやすくなる。さらに神話に注目しておけば、『古事記』では、日の神である天照大御神（アマテラスオオミカミ）、月の神である月讀命（ツクヨミノミコト）、嵐の神である須佐之男命（スサノオノミコト）の三本柱の神が、三貴神といわれているが、月讀命については、逸話が出て来ない。また、『古事記』に最初に神を名乗る天之御中主神（アメノミナカヌシ）、高御産巢日神（タカミムスヒ）、神産巢日神（カミムスヒ）という三柱の神についても同様なのである。⁽¹⁵⁾ 真ん中にある神の存在が薄い。こうした構造を河合隼雄は「中空均衡型」と呼んでいる。⁽¹⁶⁾ 同氏によれば、他民族の神話をみると、善と悪の戦いで必ず善が勝つ、あるいは、善と悪の対立の中、善が勝ち、悪を抹殺するという流れになっている。しかし、日本の場合には、天照大御神の子孫が日本の国を治めることになったが、対立していた須佐之男命の子孫も残る。元来、日本人の精神構造には、神話の中空構造から対立を許容するシステムを持っていたということになる。こうした背景の中で、物事を相対的な視点からとらえようという禪の考え方が日本人のこころに深く入り込んだということになる。

シェイクスピアの人間観について「こころのバランス」の重要性について論じて来たが、日本人がシェイクスピアの作品に触れた時、二元論的な考え方ではなく、相対的な考え方に強く魅かれたことも、こうした背景を見ると納得のいくところである。愛情にも「愛と憎しみ」という ambivalent な面があり、「こころ」の中にも「欲望と理性」が共生しているのであり、重要なことは「バランス」ということになるのだ。

Text: Alexander, Peter, editor. *William Shakespeare: The Complete Works* (Collins, 1983).

注

- (1) Ben Jonson's "Mr. William Shakespeare: and What he have left us" "He was not of an age, but for all time!"
- (2) 三好弘『シェイクスピアと日本人のこころ』（公論社、1983年11月）、p.3.
- (3) 坪内逍遙「日本に沙翁劇を興さんとする理由」（逍遙協会編『逍遙選集』第12巻、第一書房[復刻]、1977年10月）、p.639.
- (4) 三好弘『シェイクスピア——孤独と断絶』（朝日出版社、1972年4月）、pp.7-8
- (5) 鎌田茂雄『禅とはなにか』（講談社、2000年4月）、p.33.
- (6) Ibid., p.47.
- (7) 『和英対訳仏教聖典』（仏教伝導協会、1998年3月）、p.597.
- (8) 田上太秀『仏陀のいいなかったこと』（講談社、2001年7月）、p.83.
- (9) 『和英対訳仏教聖典』, p.84, p.86.
- (10) Ibid., p.122
- (11) 水野弥穂子訳『正法眼蔵随聞記』（筑摩書房、2002年12月）、p.313
- (12) Levin, Harry. *Christopher Marlowe: Overreacher* (Faber & Faber, 1975), pp.77-78.
- (13) 『和英対訳仏教聖典』, p.4.
- (14) ミルワード／中山理訳『シェイクスピアと日本人』（講談社、2002年4月）、p.33
- (15) 倉野憲司校注『古事記』（岩波書店、2003年8月）、p.18.

(16) 河合隼雄・石井米雄『日本人とグローバリゼーション』（講談社、2004年4月）、p.21.

キーワード：シェイクスピア、禅、執着心、理性